

第四回 平成二十一年七月十八日



富士山の文化史

上垣外 憲一

今、紹介にあつたように、私は長野県の生まれなんです。田舎に行くと、ちよつとこういう名前もあつて、関西は、関西で姓は少ないと思いますが、地名で似たものありますね。私、京都に十年間いましたが、京都の地図を見ると小さい地名で垣外というのがあります。それから奈良の方に行つても、昔は垣内集落とかそういうものあつたみたいですね。あれは垣の内というふうに書きますけども。私は、もう先祖代々長野県人で、しかも長野県の本曾郡なんですね。それは多少はきょうお話しする富士山と関係がないわけではなくて、ご存じのように長野県の本曾郡というのは御嶽山で知られているわけです、本曾の。私自身の経験で言うと、私は日本の高い山に結構登りましたが、生まれて初めて標高三千メートルの山に登ったのは田舎の本曾御嶽山で、小学生のときだったんです。それでやっぱ山はすばらしいというふうに思いました、やっぱりそのときは。

ちようど今、大雪山で遭難したという話が大きいニュースになっていますよね。しかも、私も今六十歳

超えましたけど、こちらの講座に来てらっしゃる方も中高年と言っていいのかな、私と余り年は違わないと思うんですけど。そういう中高年の人がそろいもそろって十人も死にましたから、ちよつとショックですね。私もこれからまた山に登ろうかとか思っていたところでこういうこともあるんだと。

山というのはそういう場所なんです、特に高山というのは。夏であつても人が死ぬ可能性があるところ。僕が初めて御嶽山に登ったときも、最初の日は天気がよくて素晴らしかったんですけど、頂上の山小屋で泊まって、朝になってみたら嵐なんです。全く前が見えないぐらいひどい霧で怖かったの覚えてます。そんな中で非常に印象的だったのは、霧で何にも見えないところをひたすら下っていくわけだけど、そうしたら雷鳥が出て来て前を歩いていくんです。これは向こうはどういうつもりで我々の前を歩いていったかわかりませんが、すべてが怖いと思つているときに見ると、言つてみれば神様のお使いじゃないかと思うんです。ついていくと危ないと僕は思うけれども、そう思つたりもしますね、そんな状況だと。

どういふことかという、山というのは日本では山岳信仰と言つて、宗教と結びついて登山ということも発達してきたわけです。木曾の御嶽山もそういう例で、私が登つたときは今から五十年前のころです。から、まだヘリコプターで荷物を運ぶなんてことはなかったですね。だから、強力というのがいてね、これは僕は今でも忘れられないです。ジュースだとか飲み物とかいろんな物を人が背負つて登つてましたが、

大体百キロ背負うんですよ、あれは。山を歩かれる方いるでしょうが、三十キロで厳しいですよ、やっぱりね、山歩くとき。若くないと、僕ももう今とても三十キロ背負えないと思います。

だから、百キロ背負ってね、三千メートル。あのころは途中まで自動車道路が下の方までしかなかったから、恐らく標高差二千メートルぐらいは一日で百キロ担いで登るんですよ。非常に感心しました、やっぱり。そういう世界があっただんですね。

それから、まだ御嶽山に登る人は信仰登山で登る人が多かったので、白衣で登っている人が多かったし、それから先達さんというのに連れられて、いわゆる講というグループで登っていく人がいます。僕らは普通の登山だったんだけど。これもやっぱり非常に印象的に覚えてます。そうすると、夜、山小屋に泊まると、行者というかそういう人がろうそくをとめて、何かいろいろ祈っているんですね。何を祈っているのかよくわからないけれども、ともかくそういうのをやっている人がいて、今のいわゆるレジャーの登山とは非常に違っていたので、とても印象的に覚えてます。

私、ことしの一月に「富士山」という本を中公新書から出して、きょうの話もそこらとることが多いと思いますが、その本の前書きに書いたんです。僕は実は富士山は頂上まで登ってないんです。日本の高い山に僕はほとんど登りましたが、富士山は九合五勺ぐらいまで登って、それから上へ行ってないんです。それはどうして行かなかったかというと、五月にスキーを担いで登ったんです。富士山でスキーと考えた

ことないと思いますが、滑れるんですね。富士山にも雪渓があつて、五月だと頂上直下三千七百メートルぐらいのところから二千五百メートルぐらいのところまではスキーで滑っておりことができるんです。三千七百まで登つて、頂上がすぐそこまで見えていたんですけど、雪がなくなつてしまつて、あと全部岩ばっかりなんですよ。スキーを担いで登つたので、もうすっかりくたびれていて、上まで登る元氣なくて、それで滑つておりたので、結局頂上まで行つてないんです、私は。

富士山は、夏は物すごい人なので、普通の登山で僕は登りたくないと思つていたので、結局その後頂上まで行かずじまい。でも、私は東京に住んでいましたから、東京からは富士山がかなり見えるんですよ、特に冬の間。明治時代なんか、一年のうちでも、例えば夏でも富士山が見えたとか、そういう記録があるようです。最近見えるのが減っているのは空気が濁つてきたためです。それでも、冬の風が強い日は、大體富士山は西の方に東京からは見えます。私の家は世田谷区にあつたんですけども、どちらかというと東京の西の方です。だから、うちの二階の西向きの窓から富士山がよく見えました、遠いんですけど。非常に遠くに、小さいですけど見えることは見える。こちら関西なので、僕も京都に移つてからは芦屋に住んでますが、二十一年目なんです。そうすると、やっぱり富士山を見る機会というのがぐつと減るんですよ。だから、やっぱり東京に出張だ何だで新幹線から見るか、あるいは飛行機から見るか。天氣が悪ければ見えませんから、一年に二、三回見ればいい方かなという感じです。

関西で富士山の話をすると、あるいは東京なんかでお話するときと、受けとめ方が違うんじゃないかなと思うんです。私、富士山の本を出したばかりなんで、講演で関西の人に富士山の話するのは、これが初めてなんです。この間、実は静岡で富士山の話をしてみましたけど、あそこは地元ですから、何話してもというかね、割と興味持ってくれて榮です。

私を呼んでくれたのが川勝平太という、さきに国際日本文化研究センターという話が出てましたけど、私が国際日本文化研究センターを出た後に、川勝さんはあそこの教授で京都に來ましてね、あの人はもともと京都の人だけど。去年、静岡文化芸術大学という浜松にある大学の学長になって、だから静岡県に移ったという形です。彼はもともと東京にいたときから軽井沢に住んでいて、京都の研究所にいたときにも京都に住まなかったんだけどね、軽井沢から出てくるというか、そういう人で。ですから、静岡に家をつくったとは思いませんけど。静岡の大学の学長になって、ついこの間、静岡県知事選挙に出て当選しましたね。ちょっと僕は、しないだろうと思っていたからちょっと驚きました。彼が静岡文化芸術大学で呼んでくれて、富士山の話をしないかということでした。僕が行ったのは知事選挙の十日前ぐらいでしたから、ちやうど街頭演説が始まっているところで、だから本当は川勝平太が僕を迎えてくれるはずだったんですけど、夜も多分おごってくれたらうと思うんだけどいなくて、事務局の人が相手をしてくれました。

彼は選挙のTシャツというか、あれをブルーと白でつくってやってたんですよ。その色の意味には、富

士山だというわけ。だから、静岡ではそういうことで票が稼げるのかもしれないけど、果たして関西では富士山の人気というのはどうかなというふうに思います。皆さんに聞いてみたいところだと思うけれど。どうしてかという、見えませんからね。それから、登りにいくといつても、東京から富士山に登りにいくような、こちらからたくさん人が行くとは思えないんですけど。

富士山に登ったことがあるという人いらっしゃいますか、この中に。でも、結構いますね。三分の一ぐらいかしらね、今手を挙げられた方。そうですか。

何から話をしようかと思いますが、一つは、例えば皆さん、古典をお読みでしたらかぐや姫。かぐや姫の一番最後のところに富士山が出てきますね。帝みかどがかぐや姫に求婚するのだけれど、かぐや姫はそれを受けないで月へ帰ってしまうわけです。その代わりに、みかどに不死の薬、死なない薬というのをプレゼント、お土産で置いていつて帰っちゃうわけだ。そうすると、帝は、でもかぐや姫と結婚できないんだから、不死の薬を飲んで長生きしても意味がないと言って、富士山のとっぺんでこの薬を燃やさせるわけです。自分で飲まないんだったら売ればいいだろうと僕なんかは思うけど、いいお金になったはず。帝だからお金は要らないかもしれないですが。

富士山のとっぺんで燃やしたことになっている。だから、富士山は今でも頂上から煙が出ているんだという、これ、文学でいうと地名説話ですね。なぜ、富士山のとっぺんから煙が出ているのか、煙がつきな

いから不尽、ふじの山となぜ名前がついたかということを説明する、そういう地名説話というのか、そういうものですよ。かぐや姫の終わりはそういつて終わる。

ということは、かぐや姫の物語が、つまり竹取物語ができたときには、富士山は頂上から煙を出してたということなんです。今はご承知のように、富士山は活火山じゃないですね。だから噴煙を上げてないんですけど、実は平安時代には、富士山は煙を上げる活火山でした。

例えば、更級日記ですね。更級日記なんかでは、煙どころか頂上のところが赤く光っていたというふうに書いてます。更科日記の著者、書いた人は菅原孝標女と言うんですね。中級貴族というのか、いわゆる受領層。紫式部のお父さんもそうですけど、地方の国司を歴任するようなそういうタイプの。だから朝廷に、京都で御殿で勤めるような、そういう上流の貴族じゃなくてね、その下の階層。庶民から見れば、それでもずっと上の方でしょうけど。

だから、お父さんは上総の国の国司だったわけですね。上総の国、つまり今の千葉県で、だから、この菅原孝標女はもともと京都の貴族の家柄なのに、東の果ての方で育ったと、自分でも謙遜している。お父さんの任期が満ちて京都に戻ることになりましたから、少女時代に、千葉から、その当時の上総国府は現在の市原市だと言われているんですけど、そこから富士山のふもとを通って、つまり東海道を通じて京都へ上がってくるわけですが、その途中で富士山を見るわけです。

でも、そのとき夜、富士山の上が赤く燃えているのが見えたと、炎のように。本当に噴火していたんじゃないなくて、溶岩なんかが、上の霧というか噴煙などに映ってそう見えただろうという説明がされます。つまり、火山現象があったわけですね。今の活火山、つまり大島の三原山とか、あるいは阿蘇山とか、浅間山とか、そういう山と同じような状態だったらしい。

それから、平安時代には、富士山は物すごい爆発をしています。これは日本紀略かな、続日本紀より後ですが、その当時の歴史記録に載せられていて、大変な爆発があったことがわかります。その当時は、律令制がまだ割としっかりしている時代です。最初の噴火の記録は続日本紀ですね。でも一番大きな噴火は、この八百年と八百二年、つまり延暦年間の爆発なんです。

皆さん、富士五湖というのはご存じですか。富士五湖は、昔は五つあったんじゃないんですよ、実はこの延暦のときの大噴火までは。富士山の北側には、剡の海（せのうみ）というふうに呼ばれる大きな湖があったんです。だから富士五湖のうち、四つか三つか、ともかく大きな湖があったんです、北側に。今では河口湖から西湖、西の湖、それから精進湖という小さな湖がありますけど、これは大きなもとからあった剡の海という湖が、延暦のときの大噴火の溶岩流で寸断されて、そうして小さな湖に分かれたものなんです。そのときの様子が『三代実録』の中に入っています。これは地元の国司から中央に漢文で報告されたものですね、当然その当時ですから。それが歴史記録に残っているわけです。ふもとにあった部落は、



ですからもう壊滅的な打撃を受けて、湖の魚が死んだのはもちろんですけど、家が皆焼けてしまつて、人がたくさん死んだようです。

こういうことがあると、その当時の朝廷は何をやつただろうか。ここが今の我々とちよつと違うところ。今なら災害対策本部というのを政府がつくりますね。県でもやるかもしれないけど、これは大きいから国でやろうとか。今度、じゃあこういう噴火が起こったときにはどういうことをしたらいいか。防ぐことはね、とめることはできないけど、地震と一緒で。でも、起きたときに被害が少ないようにするにはどうすればいいかということ。被害を復旧するのは大事だけど、それから、この次起きたときにはなるべく被害が少ないようにと考えるでしょう。これが平安時代はちよつと違うんです。何を考えたかというところ、これは富士山の神様をちゃんとお祭りしてなかったためであると。まずどういふふうにお祭りのやり方が足りなかったかは歴史書には書いてないんですけどね。やつぱりちゃんとやらせなきゃいかんと、お祭りをね。それから、平安時代は、ご存じですか、神社というのは位を持つているんですよ。従五位とかね。正一位は本当に少ないんだけど、富士山はどうでしたかね。例えば、富士宮にある浅間神社は一の宮なんです。その国の中では一番格が高い神社だから位は高かったと思ひますけど、これを、だから正二位だったとしたら従一位に、つまり、その神様の格を、位階を昇進させるんですね。これは我々が思つてたよりも偉い神様なのだというわけで、神様の位を昇進させるということをやるんです。噴火の後には当然そういう

ことが起こってます。それは記録に残っているからわかる。

でも、噴火とかは今だって予知はできるけど予防はできないでしょう。地震だって一緒です。今度、地震が起こりそうだから、対策本部は本当は地震をとめなきやいけないでしょう、起こらないように。できないからね。できないでしょう、どうしても。噴火も一緒ですよ。だから、本当は噴火はやめてほしいと思っても、やめさせることができないという点では現在も一緒なんです。どうやったら逃げればいいのかというそれだけなんで、本当は状況はちつとも変わってない、僕に言わせるとね。ですから、神様にお祈りするのも意味はあるんじゃないか、現代においても、と思います。

大雪山の遭難のニュース、ちよつとこっちは忘れられたような感じがあるけど、富士山で人が死にましたよね、三、四日前ですか。これもどうしようもないと思わないですか。五合目の駐車場に車をとめていたんでしよう。そこに何トンもある石が何百メートルも滑り落ちてきて車を貫通して、それに当たって死んだ。これも防げないですよ。金網突き破って飛び込んで来たんです。そんな五トンもある石が防げるか、金網じゃ無理でしょう、よほどコンクリートの厚いのも。そんな工事とてもできませんからね。これも不可抗力に近い。

それから、登山をやった方はご存じでしょう。落石、あれはよけられないんだ。野球のピッチャーの球より速いですから、雪溪なんか滑ってきたら。ですから、当たったら運が悪いとしか言えないね。あの人

は運が悪かったんです。これは、昔の人だったらそうは考えなかった。あそこは神聖な場所だから、夜に車をとめるということがけしからんですよ。今だってそういうふうに言えるかもしれないですね。管理者だったら、夜間は駐車禁止にしていたのに、あの人がとめてまして死にましたと言いわけするかもしれないようなことです。ここが昔の人はそうじゃない。あそこは神様の場所だから、夜に泊まるのは不敬である。だから、神様の罰に当たって死んだんだと。死んだ人にはかわいそうだけだね。昔だったらそう言っただろう。

つまり、山というのは昔の人は神様だと思っただけから、神様は要するに基本的に人間と一緒になんです。キリスト教の神様とかいうのは偉過ぎるから、怒ったり笑ったりしないと思うけれど、もともと原始的な、日本の神様も原始的だと思えますけど、原始的な神様は怒ったり笑ったりできるんですよ、人間と一緒にだから、基本的に。そういうわけだから、怒れば人を殺すんですよ、この神様たちは。だからこそ、お祭りをして鎮めないといけないわけね。

ですから、山岳宗教というのは、山というのは何か怖いところだという恐れのお感情というものがあると思います。いろんな説明ができるだろう。例えば、僕は加賀の白山についてちょっとこの「富士山」の本でも書きましたが、加賀の白山が高さは二千七百メートルぐらいで余り高くはないですけど、あそこは結構人気のある山なのは幾つか理由がある。それは、ただ怖い山というだけの話ではない。白山は、日本

海に近いので物すごく雪が多いんです。だから、これは水田の耕作にとつてはとても大事なことで、田植えの時期というのはつまり雪解け水がたくさん流れる時期だ。それから、稲が育つ時期がそうなんです。高い山は八月まで雪がありますから。つまり四月に雪解けで、それから、稲がずっと育つ時期というのは、山の雪が、冬の間に何メートルも積もった雪が、だんだんだんだん解けていつてなくなっていく時期なんです。

ですから、こういう雪が多い山のふもとの平野というのは、春から夏にかけて水の量が多いんですね。これは日本の米どころと言われているところと一致するわけで、新潟にしろ、その向こうの北の山形、秋田、この辺が日本で一番いい米がとれるところでしょう。これは明らかに冬にたくさん雪が降る地域です。それだけが理由かどうかわかりませんが、米のために適していることは確かで、だから山にたくさん雪が降るといふのは大事なことです。

白山なんかについては、冬にもう大変な雪が降って真っ白になっている。それはつまり、農業が豊かになるといふことを意味していますから、恐ればかりではないだろうというふうに思います。山の信仰はいろんな形があると思う。ただ、富士山について言うと、富士山は静岡県、太平洋の方に偏っていて、雪は降ることは降るけど少ないんです。大体富士山の周りはおろくな平野がない。みんな火山灰の台地みたいなところばかりで、たとえば雪が降っても米は大してできませんよ。静岡はミカンとお茶であつて、米どころ

じゃないです。

それから、北側の甲州、山梨県だって山ばかりでろくな平野がないです、桃とかブドウはとれるけど。だから、富士山というのは農業には全然役に立たない山なんだ。夏は、あの回りは結構富士山から風が吹きおろして涼しいんです。稲のためには全然よくないんです、温度上がらない。だから農業の役には立たない山で、信仰の形もおのずから変わってくるんですね。むしろ怖い山、厳しい山という、そういうイメージが富士山には強いと思います。

富士山に一体いつごろから人が登り始めたかという問題があります。今は、夏はずっと行列で登るんですよ。大変な数の人が頂上まで登るんだけど、昔はそうじゃない。特に平安時代はまず人は登ってないです、たびたび噴火してましたから。ただでさえ大変なのに噴火までしますから、平安時代には余り人が登った形跡はないです。これは日本のそういう山岳宗教の歴史からいうと、富士山の開発は遅いです。

関西地方で山岳宗教、修験道で代表的なのは大峰山でしょう。大峰山は世界遺産になりましたね。あそこは今でも本当に信仰登山やつてるんです。大峰山は今でも女人禁制です。女の人は入ってはいけないんです。私は「富士山」を書くから登ったわけではないけど、山そのものに興味があつたので何年か前に登りました。女性は登れませんという看板がありますよ。僕は泊まったので旅館で聞いたら、女が登れないとはけしからんと言って時々登らせろと言ってくる人がいるので困ってる。地元ではどうしたらいのか。

つまり、もう千年も前から女は登ってはいけないことになっているのに、特に世界遺産になると問題なんです。本当は。なぜかという、世界遺産になるためにはいろんな条件があるけど、人権は大事なんですよ、あれは国連のユネスコのもので。そうすると差別的なことは、非常に古いお祭りがあると思いますね、だけど差別的なものが入っているとユネスコで絶対だめとは言わないけど通りにくいんですよ。つまり、男女を差別しているのではないかと、そういうことで。

でも、幸いにしてというか、僕はなぜ通ったかなと思うんだけど、大峰山が女人禁制のままで、通ったんですよ。だから、男女差別していても世界遺産にできるという前例にはなったかもしれません。だから女にも登らせろという声がますます強くて、地元では大分困っているらしいです。皆さんも試しに行ってみたらおもしろいだろうと思います。

その大峰山ですけど、あそこは開発は早いです、比較的。富士山などに比べると。修験道の山としては、京都とか奈良から比較的行きやすいといっても結構大変です。歩いて行ったら随分あると思うけど、非常に早い時期に開発されました。醍醐寺のお坊さんたちがあそここの開発に随分努力した。聖宝上人という人がいますよね。醍醐寺というからあそこは醍醐年間に創設されています。山科の醍醐寺はご存じですよ、桜の名所。あそこは、そもそものが修験道の山なんです。だから醍醐寺の開発の歴史でいうと、上醍醐と言っている、後ろの山の上にまたお堂がちゃんとあって、歩くと一時間ぐらい登りますけど、実は上の方のお

堂の方が古いと言つてもいいくらいなんです。古いかどうかともかく、山でいろいろ修行するのが醍醐寺では中心だった。

醍醐寺のお坊さんが、主に大峰山を開発したといわれますけど、十世紀にはもうあそこは開発されてます。有名なのは藤原道長です。道長が自分で登山をして、経筒、青銅でつくった経筒をあそこに埋めて、それが後で発見されて、間違いなく藤原道長が登つて、そしてこれを埋めたんだらうということで、発掘されたときは大きな話題になったと思いますけど、そういうことがありましたね。

十世紀には京都の非常に位の高い貴族でも、そういう大峰山のような山に登ることがもう起きているわけ。だけど、富士山は少なくとも江戸時代からずっとポピュラーな登山の山で、いまだにそうだけれども、富士山は十世紀には開発された様子がありません。ただ、登った人がいたらしいことはわかります。年表のところにも書いておきましたけれど、都良香という漢学者がいるんですが、彼が自分の「富士山の記」という漢文の文章なんです、富士山の頂上の様子を非常に詳しく書いてあるんです。頂上の中に噴火口があつて、つまり、くぼ地があつてそこに水があるというようなことまで書いてある。頂上の中の噴火口の様子までちゃんと書いてあつて、それが大体実際の風景に近いので、だれかが登つて見たんだらうと言われています。都良香がまさか自分で登ったとは思えないので、だれか勇氣のある、若いでしょうが地元の人が登つて報告があつて、その国の国司が報告書を出したんでしょうね。当然、漢文で書かれて

ますから、駿河の国か甲斐の国に漢文の書ける学者がいて、国司も自分で書けますけど、そういう人が漢文で書いて都に報告をして、それを見た都良香が記録に残したんでしょう。ほかの歴史記録には残ってないんです。だけどだれかどうも登ったらしい。でもこれはどうも富士山が爆発した直後で一体どうなっているのかと、探検してこいというような命令でやつたんじゃないかと私は思ってます。だから、いわゆる今で言うレジャー登山とはちよつと違う。恐らく地元の役所、国司が命令して富士山の上まで行ってこいと。本人は嫌だったかもしれないけど、そういう人がいたようですね。

登ることは登ったんですけど、これは例外的、調査登山ですね。富士山が本格的に人が登る山になってくるのは、結局富士山の噴火活動がおさまった後なんです。大体十二世紀の後半千百何年というところで、どうやら富士山の噴火活動がおさまるんですね。そうすると登る人が出てきます。なぜかというと、十二世紀というのは、例えば白河法皇とか熊野詣に行くんですね。あれは本当に毎年のように行ってる。修験道だというのは、例えば白河法皇とか熊野詣に行くんですね。あれは本当に毎年のように行ってる。修験道だというんだけれども、とにかく上皇だ、何とか門院だというような女性たちまでみんな熊野まで行ったんですよ。そういう時代ですから修験道が大変に流行していた時期で、修験道の人たちは恐らく早くから富士山に目をつけていたと思うんです。あの辺ではもう目立つ山だからね。もともとは神様としての格の高い山だから、当然宗教的な力はいっぱいある。靈威というのかな、それが非常に強い山ですから、修行のために登りたいというのは前からあったと思うんで、噴火がおさまってきたらすぐに登り始めるん



です。

ですから、大体十二世紀の一番終わりのあたりで、富士山が修験道の山として開かれるようになります。例えば白山ですけど、白山はずっと早いです。九世紀ぐらい。泰澄という人が登ったという伝説があるけれども、別にそれでおかしくないと思います。泰澄の話は伝説ですけども、大体九世紀には日光の男体山、あれは二千五百メートルぐらいあって、北関東から東北にかけて有数の高い山ですね、登るのはそれなりに大変です。初めて登ったという記録が空海の漢詩文集、性霊集に書かれています。頂上から下の中禅寺湖とか湖を見た風景が書いてあるんですよ、空海の文集にね。これも僕は男体山に登ったことがあるんですけど、性霊集に描かれた頂上からの展望は今見るのとはほとんど変わらないです。だから、だれか確かに登って、やはり漢文の記録にして、それが空海の手に入って、それをもとに空海が書いたと思われる。空海は幾ら何でも日光までは行っていないと私は思います。都に來た學者に聞いたと書いてますしね。

ですけども、九世紀には、だからそういう高い火山、上に登ってしまうと木がなくなってしまうようなそういう火山に、修験道とかパイオニアのお坊さんたちは登っています。富士山は高さは高いけれども、上の方はもう砂ですからね。登って登れないことはないんですよ。だけれども、高さも高いこともあったかと思うけど、噴火がひどかったので登られてなかった。それが十二世紀の終わりに開発されます。

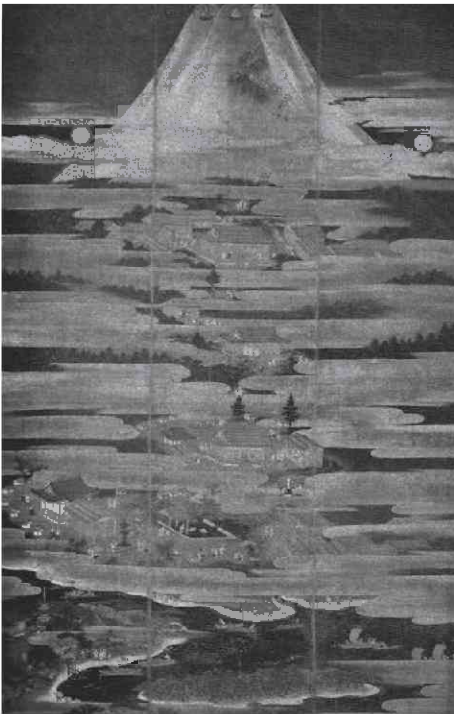
最初のうちは、素人にはやっぱり難しい大変な山だから、一般の人は登らなかつたと思います。大体鎌

倉時代の終わりごろまで、つまり十四世紀までは修験道をやる山伏というか、そういう人たちの独壇場だったようです。ところが、大体鎌倉時代の終わりから南北朝時代にかけて、いわゆる修験者、山なんかについて登るといふ、いわゆる信仰登山の形が富士山でも出てきます。

そこでちょっと絵をお見せしようと思うんです。

この絵は、十五世紀あるいは十六世紀の絵だといふふうに言われています。富士参詣曼荼羅と前は言われてたんですが、今は富士曼荼羅と呼んでくれというふうに、この絵の所蔵者である富士浅間神社では言っているようです。

それはそれとして、曼荼羅というのはもちろん皆さんご存じですね。密教で宇宙全体といふのか、世界全体を仏様の集合といふのか、そういう集合体の図柄でつくるのが曼荼羅ですね。ですけども、中世にはいろいろな種類の曼荼羅がつくられます。日本の場合は、ある山を、全体を宇宙といふか世界に見立てて、山



富士曼荼羅図（富士山本宮浅間大社蔵）

全体にいろいろな仏様がいたりするということで、普通の仏様だけの曼荼羅でなくて、山の絵が含まれているものがあります。さらに山の方が主役であるような、そういう曼荼羅がたくさんつくられるようになります。

立山もそうですね。富士山の曼荼羅もそういう新しいタイプの中世の現実の風景を入れた曼荼羅の仲間に入ります。十五世紀、つまり室町時代の中期かあるいは応仁の乱の終わった後、駿河の国というのは今川氏ですよ、織田信長に桶狭間で倒された今川義元の先祖がこの駿河を領しているわけで、戦国大名になっていきます。その今川氏が駿河を治めているころの絵ではないかという話もあります。そうすると十六世紀かもしれません。

これ富士山ですね。三つ峰というふうに言うんですけども、実際に富士山は上の方が三つの峰に分かれているわけではないんです、写真を見ればわかるんですが。しかし、絵であらわすときは、必ずこの三つの峰であらわすんですね。これが日本画の世界では決まりになっている。きょうはお見せしませんけど、雪舟も富士山の絵をかいているんです。ほかのところは中国の漢画、山水画の書き方なんです、富士山のところだけはさすがの雪舟も三つ峰でかいています。つまり、もう日本では富士山は三つ峰だと、峰が三つだというのが決まりになってたからなんだね。

ここに仏様がいるんですよ、その三つ峰に一つずつ。だから三尊。真ん中は普通には阿弥陀如来という

ふうくに考えられています。横は地藏菩薩だろうと私は思いますけれども、阿弥陀さんと組で地獄で救ってくれる。右側はただ菩薩と伝えられています、あるいは大日如来かもしれないと言われています。

曼荼羅と言っているんですから、密教と関係が深いんです。富士山も修験道の山として開発されましたが、京都に聖護院というお寺があるのをご存じですか。岡崎のあたりですね。あれは修験道の総本家の一つ、一番中心になるお寺の一つで、京都の町の中にあるんだけど、いろんな全国の修験道の山とかかわりを持っている。天台宗系の修験道ですね。

この富士山の修験道は京都の聖護院の系統というか、管轄下にあったんです。富士山の本当の姿は神様ですね。木花咲耶姫だと言っているんですが、神仏混交の時代には、だから富士山の本体は、最初は密教の中心の仏である大日如来だったんです。ずっと後の時代、室町時代にも大日如来の像がつくられています、この富士山のふもとではね。中腹のお寺では、大日如来をお祭りしてたんです。

なぜ、真ん中が阿弥陀如来になったのか。これは、だから最初の姿とはちょっと違うんです。つまり密教的な修験道が盛んだったその後に、こういう考え方が広まってきます。鎌倉時代というのは、浄土宗系の信仰が非常に盛んになる時期ですよ。浄土真宗なんかも鎌倉時代に当然始まっているわけ。そうすると、浄土宗系統で何が大事か、大事かというか何が一番怖いかというと、地獄ですよ。浄土宗系統の信仰が強くなってくると、あるいは山には地獄があると、山は地獄であるという、そういう考え方が非常に

強くなります。

例えば立山ね。地獄谷がありますね。温泉が沸いているところだけど、つまり噴気孔があつたり、すごい酸性の、酸の強いお湯が沸いてたり、つまり、生き物が住めないから噴気孔があるようなところは植物もなくなつて、岩が焼けただれているとは言わないけれども、そういう状態になつてむき出しになつていきますよね。これが地獄だというふうに中世の人たちは観念したんです。

富士山も中世にはまだそういう噴気孔みたいなのもあつたみたいなんです。そういうことよりも富士山の中腹から上ですが、要するに生き物がいない世界なんです。富士山の中腹から上の方は、全部森林がなくなつてしまつて、もう火山灰なんですね。だから生き物が生きられない場所、だから地獄だというふうに観念されるようになっていきます。

みんな信仰登山で苦しい思いをして登っていく。それが要するに地獄なんだ、地獄の責め苦なんですよ。だから頂上まで行くと、当然地獄から救ってくれる仏様がいないといけない。だから真ん中に阿弥陀さんなんですね。

ついでに言うと、富士山の信仰登山を開いた人は末代上人いう名前で、その人の事跡は『地藏菩薩靈驗記』という本に書かれています、鎌倉時代のもんです。地藏菩薩の信仰、つまり地獄で救ってくれる仏様が地藏さんですね。末代さんのやったことは地藏菩薩の信仰なんだという考え方があつた。それはなぜかとい

うと、富士山が地獄だからなんです。だから死の世界ですね。それは確かに実際の風景とも合っている。

同時にそれは、人間は死んだら天国に行くんでしょう。だから死んだ、あるいは極楽に行くんですね。死ぬことと極楽に行くことは、地獄に落ちちゃうかもしれないけれども、紙一重なんですね。だから、地獄に落ちるような物すごい苦しい思いをして、てっぺんまで行くとすばらしい景色が見える。

それから僕の経験でも、あそこは空気が薄いですからちよつと一種、夢遊病状態というか、意識が薄れてきますけれども、それで下界をはるかに眺めていると、考えようによつては極楽というふうにとれるかもしれない。半分死んだ状態ですよ、ともかく。だから、こういう地獄のような死の世界を通り抜けて、富士山という山頂は極楽でもあるわけですよ、阿弥陀如来がいて救ってくれますから。そういう信仰の形ですね。

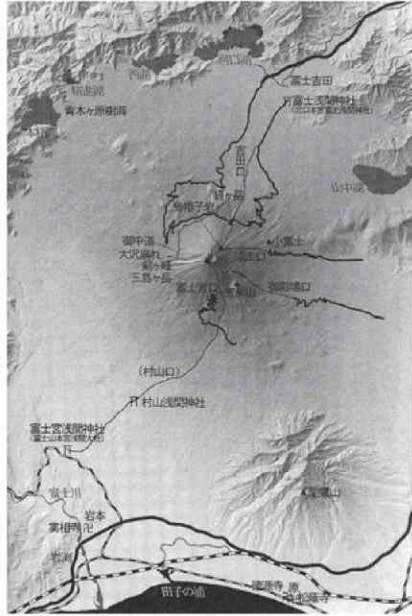
ついでに、絵について説明しておく、この白い円は多分月ですね。こっちの金色の円は、太陽だと思いますけど、日（じつ）、月（げつ）です。どうして中腹あたりを日と月がめぐってるかというと、これも仏教の思想と関係がある。仏教で一番神聖な山は須弥山です。語源はシュメールだとも言われているけれども、サンスクリット語で仏教世界、世界の中心にある物すごく高い山です。二十何万キロメートルとか、インドというのは誇張がすごいから途方もない高さなだけ。そういう巨大な山が海からそびえ立っているんですね、あの須弥山というのは。余りに高いので太陽も月もその中腹をめぐっているんです。

だから、山の富士山の中腹を日（じつ）、月（げつ）がめぐっているという図像は、仏教の中でこれを俱舎論というものに出て来る。これは世親というヴァスバンドゥという仏教哲学者、奈良の興福寺にあるでしょう、世親の像。無著、世親像という有名な運慶がつくった肖蔵彫刻ありますね。世親が説いている『俱舎論』という小乗仏教の概説書なんですが、その中で須弥山の説明をしています。その図像に合わさっていますね。

興福寺でその世親の像があるというのは、興福寺というお寺は唯識宗でしょう、中心になるのは。その世親というのは唯識思想の元祖というか、唯識哲学をつくった人だからあそこにある。だけれども、俱舎論という小乗仏教の概説書もつくっている大変な学者だったんですね。

俱舎論というのは、南都六宗というのはご存じですか。奈良の古い仏教の六宗派のうち、俱舎宗というのがあるんですね。だから奈良時代には実際一生懸命勉強されていた、今はだれも読まない。あれで読むのは大変。私も全部は読んでないというか須弥山のところだけ読みましたけど、それに出てきます。だから奈良時代から日本人は実は須弥山というのを知っているんです。いつの間にか富士山が須弥山という思想ができてきたようですね。

地図を御覧になって下さい。富士山は今北側は富士吉田から登ります、山梨県の方から。東側はほぼその正反対ですね。真南から自動車道路が新五合目というところまで続いていて、そこからみんな歩



富士登山地図

き始めるわけなんですけれども、それを富士山の表口登山道と今言っている。一番人がたくさん登るところなんです、この登山道は、実は今の静岡県側の表口登山道ではないんです。今、この部分はほとんど道はわからなくなってるぐらいのものです。これは村山口というふうに呼ばれている登山道なんです。

もう一度「富士曼荼羅図」を見て下さい。

これは駿河湾にある三保の松原です。松の木が生えているでしょう。これは駿河湾の西岸です。それから、富士宮の浅間神社というのは富士の周りの神社で一番格が高いお宮ですけれども、富士山の真南にはないんですよ。行って見ればわかりますけど、富士宮市というのは富士山の西南なんです。ここはだから本当は真南じゃないんです。西南から見た富士山なんです。西側の三保の松原や、これは清見寺という禅寺ですけれども、西側から富士川を渡って富士宮神社に行きます。そこでお参りをして、ここで水ごりをとっている人がいますね、身を清めて、ここまでは女の人いるんです。その上に興法寺という密教のお寺があります。恐らく天台宗だったでしょう。ここを見るとちょっと小さくてわかりにくいんですけど男の姿だ



けなんですね。女の人はいいんです。これを見てわかるのは、つまり室町時代でも富士山は基本的に女人禁制だった。富士宮浅間神社、あそこは木花咲耶姫で、女の神様ですから行ってもいいんだけど、上はだめ。上の方は仏教寺院が管理していて女の人は入れなかった。大峰山と一緒だったんです。ついでに言う、明治時代まで、明治の初めまで富士山は女人禁制だったんです。江戸時代について言うと、辰年です。だから、十二年に一回だけ五合目まで登れたらしい。頂上はだめですけどね。だから、辰年には女の人の登山が多かったそうです。というかその年しか登れないんですね。

これで見ると、ですからこっちは西南からの登山口が実は富士山の表口だったんです。一番重要な登山口だったんです、室町時代には。それは当然でしょう。室町時代、東国、つまりここから東で多少人口があるのは鎌倉だけです。あとは、関東は全然未開の地とまでは言いませんけれども、まるで人口が少ないんです。それから、経済力でも西と比べものにならない。だから全部関西からとまで言いませんけれども、尾張とか、西側から登りに来る人が多かったということなんです。今の村山口は、東京から来ると一たん富士山のふもとを通り過ぎたようになって戻る形になるんです。だから東京から来るようになったら登らないです。江戸時代に一番よく登られたのは、実は北側の富士吉田から登って御殿場の方、つまり東南の方におりるのが一番使われました、江戸から来る人たちにはね。

なぜかという、それが一番まず登るときに楽なんですね。なぜかという、富士吉田のあたりは富士

五湖もそうですけど、標高が九百メートルあるんですよ。それまで、江戸からずっと、江戸は海岸にあるでしょう、海拔ゼロから九百まで何日もかけてゆっくり登ってくるわけ。そこから登りますから九百メートル分節約できる、一日の登りとしては。それを静岡側から登ると大変なんだ。ゼロから登らないといけないですからね。だから北から登って南は砂走りと言ってね、火山灰の道を走り下るんで、それも真南におりるんじゃないかって東南の方に、つまり箱根の方に向かって降りるんです。そうすると江戸が帰りに近くなるから。

ですから、この図を見ると、だからまだこれだけ見ても、つまり西側から登っているというふうにこれを読み取れば、つまりこれは江戸時代じゃないというのがわかるんです。つまり西からの登山者が多かった室町時代までのものだということが、それからでも言うことができる。

絵を幾つか用意してきているので、ほかのもし見てみましょうか。

江戸時代にかけて富士山に登る庶民というか、修験道の専門の人じゃなくて一般の人の登山というのは多かったんです。例えば、静岡に来ていたキリスト教の宣教師が、富士山に人々がたくさん登っているというようなことを、これは大体十七世紀の初め、つまり江戸時代始まったばかりのころのこととして記録しています。だから、江戸時代になって初めて富士山にたくさん人が登るようになったんじゃないんです。鎌倉時代の終わりごろから、実はたくさんの人が、さっきの絵、ずっと人が続いて登っていたのが見えま

したか。ずつとアリのように続いて登っているんですよ。つまり、室町時代でそうだったんです。でも江戸時代になると、もっともつとたくさん人が登るようになります。それは江戸の人口が非常にふえたことが関係している。富士山に登りたいと、日ごろもう忙し過ぎて、でも一生に一度は富士山に登りたいとかいう人がふえてくる。

もう一つ、富士山というものが日本の中で非常に人気が出るという現象があります。それは、私の専門とちよつと関係があるんですけど、江戸時代には朝鮮通信使というのがありました。つまり、江戸時代、徳川幕府が正式の外交関係を持っていた国は隣の朝鮮だけだったんですね。中国とはいろいろな問題があつて、実は外交関係がないんです。だから唯一の外交関係のある国から、当然その国の大使とか使節が日本を訪問するわけです。それが朝鮮通信使です。将軍がかわつたときに、つまり前の将軍が亡くなつて新しい将軍が就任したら、それをお祝いするという名目でやつてくるから、大体二十年に一回です。だから、江戸時代二百六十年間のうち朝鮮通信使は十二回だけです。大体二十年に一回でしょう。そのうちの最後の一回は松平定信のときですけども、対馬で止まつてゐるんです。そこでもう歓迎の行事をやつて帰つてもらふということをやつてゐるので、最後の通信使は富士山を見てません。ですけども、最初の方の十一回は全部東海道を通つて江戸まで行つてます。だから富士山のふもとを通るわけですね。

そうすると、朝鮮はいろいろ山はたくさんありますけど、富士山みたいに高いのはないですから。最高

峰のペクトゥ山、白頭山は火山だけど二千七百メートルぐらいでしょう。それから白頭山を見たことのあの朝鮮の人は非常に少ないと思う。あれ北の端の山です。有名なのは金剛山ですけど金剛山は二千メートルないです。あれは東洋の名山なんだけれども、高さは大したことないんです。だから、来れば富士山見ると驚くんですね。それから普通の山は、大体、例えば木曾の御岳山もそうだけど、山の中にまた高い山があつて、だからその山のふもとが既に標高千メートルあるとかそういうところが多いんですよ。富士山は海からそびえているから、もろに三千七百メートルなんですよね。海拔ゼロから見るとこれは高く見える。

僕はヒマラヤのトレッキングというのも行つたことがあつてヒマラヤの高い山も見ますけど、それは高くて立派だけど、ただ自分が立っているところも四千メートル以上あるんですよ、既に。だから、そこから六千メートルの山を見たつて富士山ほど高くは見えないですよ。そういう点からいうと、見た高さというのは特に静岡県側から、ふもとから見ると物すごく富士山は高く見えるんです。だから、朝鮮通信使も驚くからたくさん記録に残しているし詩もつくっています。朝鮮通信使は皆、漢詩ができる知識人だから、漢文が書ける人で詩もつくれるんで、富士山の詩をたくさんつくっている。そうすると、日本人も朝鮮人があんなに褒めるんだから、富士山というのはすごい立派な山じゃないかというふうに考え始めるわけです。もともと立派な山だと思つてたと思うけど。

こういう言い方が、だから江戸時代にたくさん言われます。つまり富士山というのは三国一の山である。三国は、この場合は昔は天竺を入れて、インド、中国、本朝なんですけど、江戸時代だと恐らく日本、朝鮮、中国の三国だと思えます、私は。それにしても、朝鮮、中国入れてもこんな山はないんじゃないかということなんですよね。つまり、朝鮮の人があれだけ褒めるんだから。これは別に理由のないことではなくて、例えば中国で名山と言われているのね。どうですか、泰山というのは登られた方はありますか。山東省にありますけど。

いますね。私も登ったことあるんですけど、あれは大したことないよね、高さは。名山でしようけれども、千五百メートルぐらいですよ。あれが中国一の名山なんだ。だから、日本人から見ると高さは大したことないんじゃないという。中国で五岳、五つの一番の名山というのは、大体高くて標高二千ぐらいね。それから我々が名前知っている山では蛾眉山、あれは標高三千ちよつとでしょう。富士山よりは低いんですよ。

ただ、江戸時代でもっと高い山があるのは知っていた、日本人は。それはね、崑崙山なんです。これは今問題になつて新疆ウイグル自治区、あそこにある。あれは標高五千ぐらいあるから確かに富士山よりは高いんですね。けどよく考えてみると、あそこはもともとウイグル族の土地で、新疆と。新しい領土という意味でしょう。つまり、もともと中国人が住んでいない場所なんだ、あそこは。ヒマラヤの山

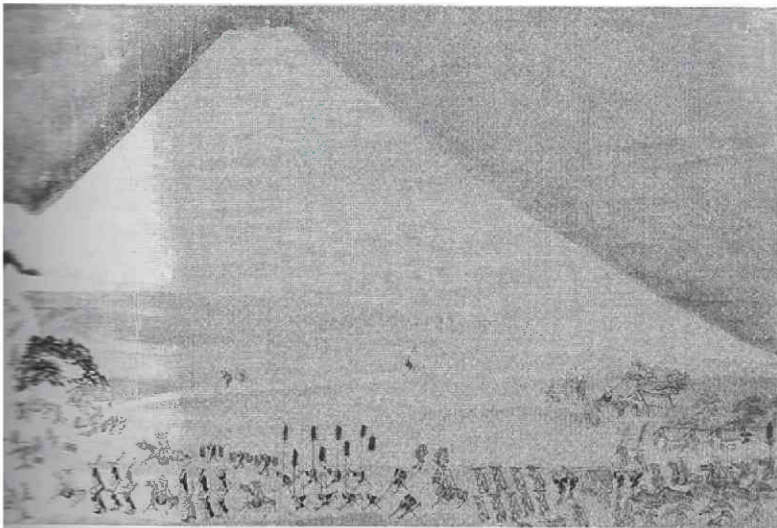
もそう。チベット人が住んでいるんで、中国人が住んでいたわけでない。だから、もともとの漢民族の居住地で見ると、高いのはせいぜい蛾眉山の三千五百メートルぐらいで、五岳はみんな二千五百メートル以下です。

だから、そうしてみると富士山の方が高いではないかという話になるんですよ。つまり、中国を入れても富士山はどうやら高いらしい。これは江戸時代の百科事典、『和漢三才図絵』というのがあるんだけど、あれに載せられていますから、江戸時代からそういうことを気にしてたらしいのがわかる。だから日本一どころじゃないと、これは三国一だと。つまり東アジアでナンバーワンの山じゃないかということが江戸時代に非常に言われるようになったんです。それだから、なおさら富士山人気というのが上がることにあります。

さて、この絵は江戸時代にかかれたものです。白隠という、この人は江戸時代で一番すぐれた仏教者であると言われていますけれども、白隠という人が八十歳超えてから書いた、最晩年に書いた禅画です。富士山のふもとを大名行列が歩いているが、この絵を見るとどうも大名行列が、何ていうのか、しょぼくれているのか、立派に見えないんです。大名行列というのは胸張って威張って歩くものでしょう。それがみんな前かがみというか、富士山に遠慮しているのかしていないのか、ともかく余り意気が上がらない感じでみすばらしく見えます。実はそこにこの絵の意味があるんです。富士山は白隠にとっては禅の悟りの

象徴なんです。一番奥深くて高いものです。人間からも超絶した物だ。だからそういう人間から超絶した富士山から見れば、つまり禅の悟りの境地から見れば、威張っている大名、大名というのは江戸時代で一番偉い者でしょう、將軍を除けばね、一番身分の高い大名といえども、富士山から見たら小さなものだという、そういう考えなんですよ。

これは、白隠が自分で書いた本の中で大名行列の批判をしているんです。あんなものは必要ないと。今の公共事業を減らせというのに近いんだけど、大変な経済的な損失であるということを言ってます。今は平和なんだから、大名も供の十人でも連れて歩けばいいだろうと。あんな何百人も連れて歩く必要はない。なぜそんなに威張り返ってやらなきゃいけないのか、むだなことをというので、非常に厳しく批判しているんで



白隠「富士大名行列図」白性寺大雅堂蔵、芳沢勝弘『白隠—禅画の世界』

すね。それを禪の境地から見れば、大名行列なんぞはつまらないもの。富士山から見れば、武士といえども大名といえども、ずっと下の者なんだと、そういうことなんです。

江戸時代に、庶民が一生懸命富士山に登った理由もこの気持ちと多分つながるところがある。江戸時代に富士講というものができて物すごくたくさんが富士山に登るんです。それには一つの事件がかかわっている。享保時代、享保十七年、当然徳川吉宗の治下です。その年に食行身祿という人、これは行者の名前です、富士山に何十回も登ったという。年表にも後の方に出てるかと思いますが、彼が富士山の七合目の岩室、岩の洞窟で三十日間ぐらい断食をして死ぬんですよ。つまり自殺ですね。今風に言えば自殺で、昔は入定とか、そういうこと言いました。生きながら即身成仏だ。この場合、富士山の行者だから必ずしも仏教とは言えませんが、気持ちはそんなものですね。これを機に、江戸の庶民の間で物すごい富士登山ブームが巻き起こる。それまでからたくさん登ってるんだけど、江戸の庶民がみんなとは言わないけど、大変なブームが起こるんです。

ところがこの食行身祿は秘伝というか遺言の形で彼の思想を残していて、それは富士講、つまりグループを組んで富士に登る人たちの間で秘伝とされていて、つい最近まで、つまり戦争が終わった後によく表に出たんですけれども、その内容を見ると、なぜ死んだかという理由がはっきりと書いてある。

要するに、徳川吉宗の政治に対する抗議なんです。今だったら、選挙に行って民主党か共産党に入れ



ばそれで政治批判したことになるんでしょう。徳川時代、そんなことできませんから。そんなことやったら一遍で殺されちゃう。そのかわりに断食、ハンガー・ストライキで自殺したわけだね。でも表には出なかった。でも富士講、富士登山に参加する人たちには秘密に伝わっていたんでしょう、だからあんなに人が集まったと思う。何を批判したか。要するに、徳川吉宗の政治は庶民をいじめているということなんです。徳川吉宗は、徳川幕府を立て直した中興の祖ですよ。名君だと言われています。それは幕府や侍にとっては確かにそうだったけど、庶民にとっては必ずしもそうは言えないんですね。

まず第一に年貢を徹底的に厳しく取り立てた。それから米の値段をつり上げた。米の値段をつり上げるということはどういうことか。日本史では今教えていると思いますが、武士の給料は石高ですよ、米の。だから、武士の給料は米で支払われているわけね、年貢で取り立てた、税金で取り立てた。だから、それを武士は米を売ってお金にかえて、またほかの必要な物を買うわけですね。だから米の値段が上がれば、武士の給料は石高が上がらなくても現金で考えれば、お金で考えれば給料上がったことになるわけです。逆に庶民から見ると米の値段が高いわけですから、年貢を同じ量とられても、現金で考えれば余計にとられていることになるわけです。

それから、当然米の値段が上がれば庶民の生活のもとですから、物価が上がったということになります。だから、米の値段をつり上げると得をするのは武士で、損をするのは庶民。税金を払う側ですね。これを

痛烈に食行身録は批判している。なぜかという、その前の年に大飢饉があつたんです。たくさん人が死んでいる。何十万人というふうに言われているんですよ、その年。さすがに、それで江戸の庶民も怒って、米の買い占めを將軍から命令されてやっていると言われている米屋に押しかけて、「打ちこわし」をやるんです。これが江戸時代最初の打ちこわしで、食行身録が富士山で自殺する三カ月ぐらい前ぐらいの話なんです。

私は十年間国立の研究所にいて、そのときはまだ独立行政法人じゃなくて国家公務員だったんですよ。僕はその前私立大学で今も私立大学ですけど、国家公務員の給料をもらっているのを僕は非常に気分が悪かったです。今、財政は大赤字でしょう。半分が国債で、つまり借金してやっているんですよ。だから、そういう大赤字の財政の中で、人並みの給料をもらっているのを僕は非常に気分が悪かったです。そう思う人は少ないかな。そこが、僕が公務員というものの不愉快なところだというふうに思っている。この中で公務員のOBの方がいたらごめんなさいね。私はそう思っているんです。もらってもいいですよ、もらわないと生活できないから。ただ、申しわけないかどうかというふうに私は思います。

私、この大学に移って来て、ここは一応財政は黒字です。私の給料のうちの三分の二は、恐らく学生さんが払ってくれる授業料です。文部省の補助金もありますから三分の一ぐらいは。その三分の一が国から来ているのが僕は今でもちょっと嫌なんだけど、でも給料三分の二にしてくださいと言う気もないけどね。

でも、気持ちには三分の二軽いですよ、正直言つて。だから、国家公務員の待遇が良過ぎると思う、仕事に對してね。というのが今の世論だろうと私は思うんですね。

それを見ると、江戸時代の食行身祿の断食自殺の話というのは非常によくわかる。政府に対する怒りですね。武士というのは、税金を払わない人たちで、税金から全部給料が来ている人たちで、今の公務員はちゃんと税金は払っているからね。今の公務員よりある意味で悪いです。その怒りなんだね、武士階級に對する。それが実は、江戸時代に江戸の庶民が我も我もと富士山に登りにいった大きな動機なんです。それだけとは言いませんよ。山に登ればそれはそれで楽しいから。いろんな景色も見れるし、それはそうなんです。観光ですけれども。江戸時代の富士登山というのは、そういう庶民の怒りの、でも打ちこわしをやるほど勇気のあるやつは余りいないから。しかも後で死刑になるでしょう、それは。だから、そのかわりにみんな富士山に登りにいったんですよ。これはいわゆるガス抜きというか、そういううつぶんの発散の方法としてはなかなかおもしろいというか、いい方法なのかもしれない。でも今はみんなが、特に中高年の人が最近山によく登るのはなぜなのでしょうね。怒りからではないように思いますけども。

あと江戸時代、本当はいっぱい話したいことあるんですが、明治以降はそういうことはなくなります。僕の思ったのは、江戸時代の終わりまでは富士山は庶民の山、特に江戸の庶民の山でした。大名なんか登らないですよ、身分の高い人は。ですけども、明治になってからは、日本の国家の象徴といいますが、

ナシヨナリズムの象徴に変わっていきます。それは、我々がよく知っていることだから、きょうは余りお話ししないことにしようと思います。ですけれども、もともと宗教の山として開かれて、江戸時代には特に庶民の山という趣が強かったということは、知っておいた方がいいと思います。

きょうはちよつと絵だけお見せしましょうか。葛飾北斎の富嶽三十六景。庶民の姿と富士山が一緒に描かれている図柄が多いんですね。これなんか非常に有名なものですが、桶づくりが仕事をしているわけです。大きな桶をつくっていて、富士山は遠くにあります。これはいろんな絵の見方はあると思うけれども、江戸時代の富士山というのは、こういうしがない田舎の桶づくり、そういう人でも頑張ってお金をためるというか、富士講という形で行くんですけど、ネズミ講とか無尽講とかいろんな言い方があるでしょう、みんなで集まってお金を出し合っていて、普通では事実上貯金と一緒にすけれども、普通ではやれないようなことをやるわけですね。

だから、富士講に参加すればこのぐらいの桶づくりだって、頑張っ



北斎「富嶽三十六景」から尾州不二見原

山となるで、例えば五年間金をためれば、遠くの高い富士山でも登れるというのが、多分その心じゃないかなと私は思います。だから、桶屋のつくる桶の方がずっと富士山より大きいんですよ。つまり、桶をつくっていけば富士山のとつぺんを踏むことができる。つまり、富士山より高い場所に行けるんだよね。頂上に立てば自分の頭は富士山より高いでしょう。そういうことの象徴というふうに見れます。江戸時代のそういう社会状況とか文化状況とかを知っていると、『富嶽三十六景』はもう世界的に有名な名画ということになっていきますけど、見方も多少変わってくるんじゃないかなと思います。

ちよつともう時間がなくなりそうなのでここまでにしますが、でも質問があれば受け付けます。  
よろしいかな。

### 受講生

全く話が尽きないので、すべてはお聞きすることはできませんけど。

年表の最初に、六六三年、白村江の戦いというのが出てきまして、たまたま、この年表というのは日本にとって非常に重要な時期だと思うんですけど、そういうのは富士山の文化史の中に出てくるというところを教えてください。

### 上垣外憲一教授

白村江の戦いそのものというよりも、要するに日本が外国と非常に緊張関係にあった時代ということの代表で出したわけですね。だから、白村江の戦いは日本と百済の、百済は滅びているけども、百済の残党の連合軍と、唐と新羅の軍隊が衝突して日本が負けますね。その後日本というのは物

すごい緊張状態になるわけです。例えば太平洋戦争のときと比べてもいいかもしれないですよ。

そうすると、これから日本にも唐の軍隊が押し寄せてきて、日本が負けるかもしれないという、そういうときです。そういうときには、非常に古い時代ですけど、やはり日本の国、これは駿河の国だとか甲斐の国だとかそういう話じゃない。日本対新羅、日本対唐が対立しているというときになると、富士山がやっぱり日本で一番高い山でしょう、これが日本のやっぱり象徴というふうに思われた。奈良時代はかなりそういうことが言えると思います。

だから、山部赤人の有名な富士の歌がありますね。あれの調子は、実は明治時代の富士山に近い。なぜか、大きな戦争を外国とやっている時代だから。だから奈良時代と明治時代は、例えば明治になって王政復古だとか言って、奈良とか平安の初めの天皇中心の律令制に戻るんだということでしょう。そういう意識があるということは、日本全体が国家として一つにまとまっていなくて外国にやられちゃうという海外に対する危機意識なんです。そうすると、そういうときには日本全体をまとめる象徴として、富士山というのがクロースアップされる。だから、実は奈良時代と明治時代は、時代は非常に離れているけど、その点では富士山のイメージが近くなるんですよ。江戸時代みたいに余り外国と緊張関係がないと、そういう意識は薄くなるんですね、というのが僕の考え。

山部赤人の富士山、あるいは高橋虫麻呂歌集の富士山のイメージは、だから非常にナシヨナリスティッ

クなものを含んでいます、民族主義的なものを。それは一番近い近代にむしろ似ている。つまり、中世とは非常に違う。富士山が地獄だというような考え方と非常に違いますね。

司会 ほかにどなたかございますでしょうか。

受講生 明治の直前に富士山艦という、これは軍艦のようですが、これは幕府が発注した船ですか。

上垣外憲一教授 そうです。

受講生 どんな装備、機器があるんですか。

上垣外憲一教授 富士山艦は幕府艦隊の旗艦でした。將軍家茂が大阪の方に行きますよね。あのときの旗艦は富士山丸です。それから、長州征伐のときの旗艦もそうだったと思います。重さ、トン数でいうと千トンぐらいですけど、それが幕府海軍が持っていた最大の軍艦だったんです。発注はアメリカにしています。ニューヨークかどこかで建造されたアメリカの蒸気船ですけども、幕府の艦隊の一番大きな船で、その次に巨大なものをオランダに発注していますけど、開陽艦という船があつて二千六百トンです。これができるまでは、榎本武揚がオランダ留学しているでしょう、あの連中が操縦して日本に戻ってくるんだけど、もう慶応です。幕末の最末期だけど、その海洋艦がオランダから日本に着くまでは富士山艦が日本最大の軍艦だったんです。長州征伐のときは高杉晋作のオテントサマ丸というのにやられるんですね。そういうようなこともありますね。

やっぱり幕府は静岡が本拠地でしょう。徳川家康なんか駿府に住んでいたわけだし。それから、明治になつてからは沼津へ引っ込みますよね、徳川家は。そういうことで、静岡が一番の本拠地で、そこにあるやっぱり富士山というのは、幕府にとつては、だから自分のおひざ元の山という考え方。幕府はつまり、薩長や関西方のいわゆる勤王派と基本的に幕末には対立していたわけだから、やっぱり静岡にある、自分の本拠地にある富士山の名前を最大の軍艦の名前にしたのはそういうことだと思う。自分とところの一番立派な物だという、そういう意味が含まれているんじゃないでしょうか。その場合は関東と関西を対立させて、富士山を関東の象徴にしているわけですね。というふうに僕は思っていますけど。

### 受講生

富士山に対するイメージと同様のものが世界じゅうでありますけど、金剛山と言われましたけど、それ以外に例えばアメリカとかヨーロッパ。

### 上垣外憲一教授

僕はそれをこれからやりたいと思っっているんですけどね。つまり世界の山岳信仰とか。ただ、今言えることは、キリスト教というのは山に対して非常に冷淡というか敵意さえ持つて、持つていたということですね。だから、キリスト教世界、キリスト教以前には山の崇拜があったと思うんです、原始宗教で。日本の神道と同じようなね。ところが、キリスト教はそれは異教のもの、つまり自分から見れば邪教であるという考え方で、山岳信仰をつぶしたという感じを受けますね。だからキリスト教世界では、登山はずつと行われないんですよ。山は悪魔が住むところなんだと。だから、魔女なんか山の



中で集会を開いたりするわけですよ。

そういう場所だから、神様がいる場所ではなくて悪魔がいる場所なんですよ。トーマス・マンに「魔の山」、あれはツァウバーベルクで魔法の山ということだけど、でもそれも異教と関係していますよね。だから、キリスト教世界では登山が、みんなが山に登ってなんてことは非常に最近の話で、中世には全くないと言っています。

だけれど、例えばネパール、それから須弥山という考え方がインドから来ているわけだし、やっぱりインドはヒマラヤを崇拜する、ヒマラヤは神様ですからヒンズー教でも。それから、僕はネパールへ行ったことがありますけど、ネパールはやっぱり山岳信仰は非常にありますよね。

だから、今でも登山禁止の山がありますよ。登山の届けを出したって受け付けないですよ、十かそのくらいの山は。エベレストは登っていいけど、マチャプチャレという山がありますでしょう、ポカラにね。あの山は今でも、登山禁止です。なぜかという信仰の山だから。日本の場合、そこは微妙なんですよ。だから、大峰山は女人禁制とかね、女はだめといういい方ではあるけれど、男も女も登ってはいけない山はないんだね、日本は。

つまり人間が登ってはいけないという山はないんですよ。だから、山を神様として本当に崇拜するんだったら、実は神様の頭を土足で踏むのは非常に失礼な話であって、全然登れないという方が、本当は山岳

信仰の本当の姿かもしれないというふうには僕は思います。だから、庶民でもそういう神聖な山を土足で踏んでいいというのは、ある意味で新しいことなんですけどね。

山伏という者は、昔は怖いものだったんですよ。なぜ怖いかというと、普通の人が行けば、行つて遭難して死んでしまうような山を何カ月も歩いてもちゃんと生きて帰ってくるわけだから。これは特別な人間ではないかと思う方が正しいでしょう。だから、山伏は特別な霊力があるというふうに思うわけ、それが山伏なんです。それは山がとても神聖な場所、また恐ろしい場所で、だからそういう場所を自由に歩ける人は普通の人間とは違っていると。宗教的にすぐれた人だという、そういう考え方でしょう。

近代の考え方では、登山家というのは技術がすぐれて、技術と体力がすぐれているから我々より上なんだ。スポーツですね、これは。だけど中世や江戸時代まではそうではなくて、やっぱり山が宗教的に深くて神聖な場所だから、そこで修行をした人には霊力がある、宗教的な力があるというそういう感じ方ではないでしょうか。

明治以降の日本政府は、そういう山、特に富士山に対するそういう宗教的な信仰をうまくことナシヨナリズムに変えたというかね。不思議に思うのは、軍艦の名前に山の名前が多いでしょう。赤城とか、金剛とか、山の名前どんどんつけてる。三笠なんて、あんな小さい山の名前をどうして一番大きい軍艦につけたかと僕は思うけれども、三笠だって山ですよ。それはやっぱり山岳信仰と何らかのつながりがやっぱり

りあるのではないかと私は思いますけれど。

**司会**

興味深くお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

上垣外先生に拍手をお願いいたします。

(拍手)